連続講座「新・大阪学事始」

大阪からみた「大阪の近代文学」

高橋俊郎（大阪文学振興会・帝塚山派文学学会・オダサク倶楽部）

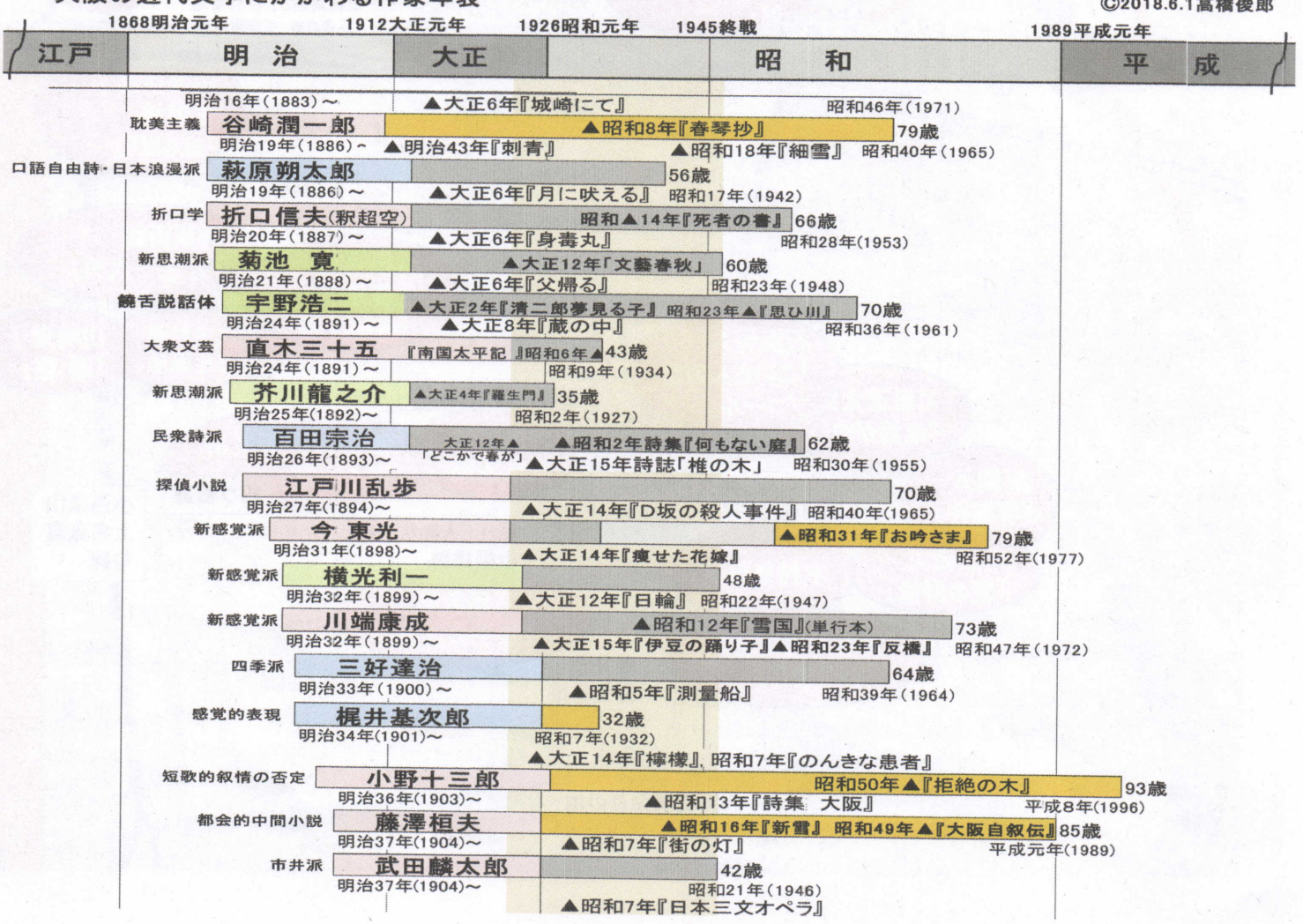
第２回　大阪で生れたから生れた小説や詩
～百田宗治・梶井基次郎・三好達治・そして小野十三郎ら～

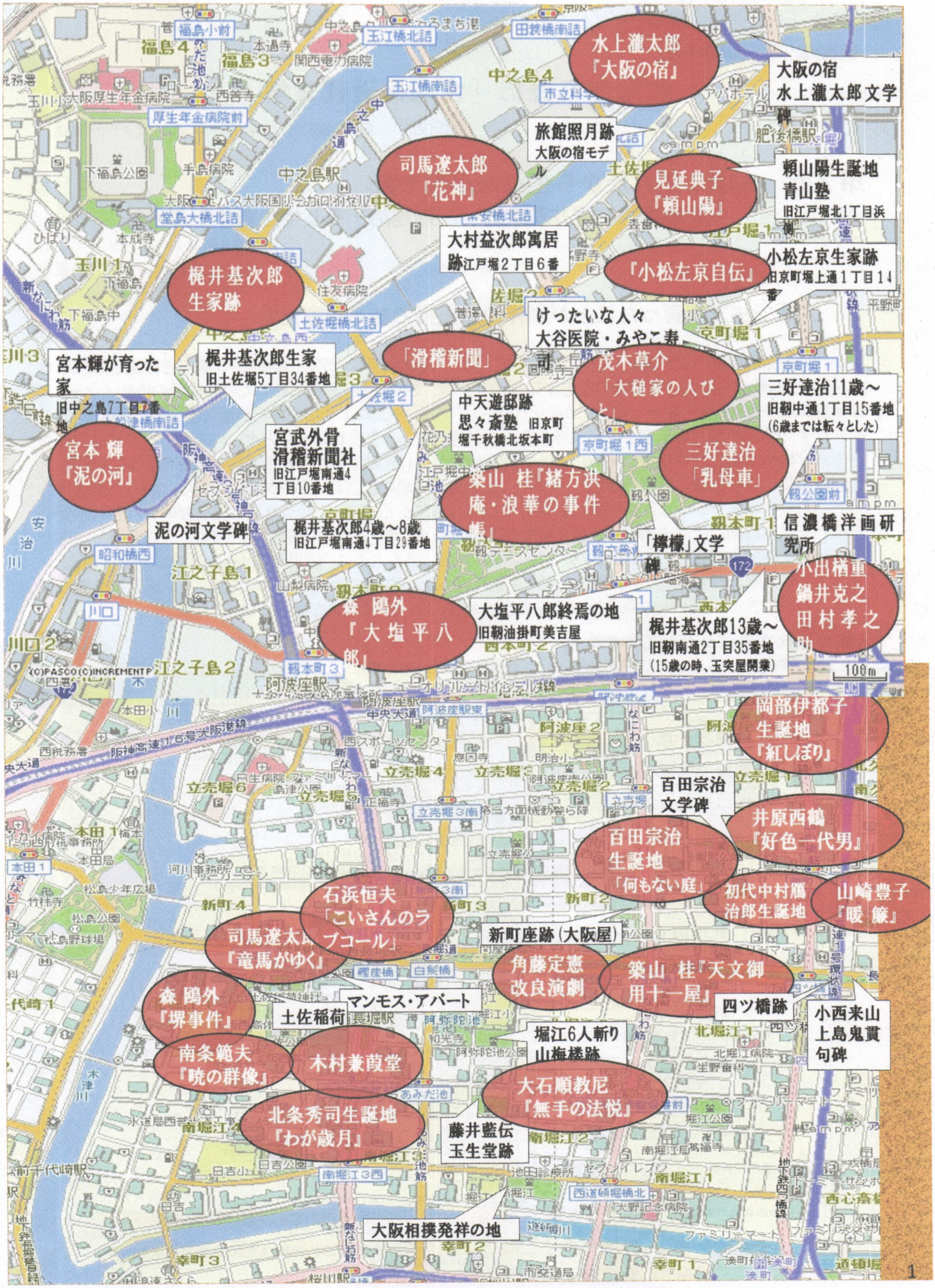
2013年6月12日(火)
於：淀屋橋マスターズ情報館

１．大阪で生まれ育ったことが創作の原風景である作家たち

かつて文芸評論家の奥野健男は、「“名作の旅”とか“文学散歩”とかいう趣味的な観点とは違う強烈な感銘を風土、風景におぼえ…文学者の思想や気質や美意識、文学作品の基調となっている作者の内的イメージ、深層意識は、その風土や風景と密接にかかわりあっている。…このような文学の母胎でもある“原風景”は、その作家の幼少年期と思春期とに形成されるように思われる。生まれてからと七、八歳頃までの父母や家の中や遊び場や家族や友達などの環境によって無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する“原風景”、それは後年になればなるほど不思議ななつかしさを持って思い出され、若い頃にはわからなかった繰返されるその風景やイメージの意味が次第にわかるようになってくる。もうひとつは二十歳前後のもっとも感受性が強い人格形成期に受ける衝撃的な原体験や感銘によってつくられる“原風景”である。“原風景”は作家によって説明的、直接的に描かれない。しかしその作家の書くものに“原風景”は色濃く投影されている。」と「文学の原風景」を説いたが、特に大阪に生まれ育った小説家や詩人には、大阪という原風景を色濃く感じることができる。個々人の原風景に通底する「大阪」という原風景を探っていきたい。

大阪の近代文学にかかわる作家年表




水上瀧太郎『大阪の宿』
大阪の宿 水上瀧太郎文学碑
旅館照月跡 大阪の宿モデル
司馬遼太郎『花神』
見延典子『頼山陽』
頼山陽生誕地 青山塾 旧江戸堀北1丁目浜側
大村益次郎寓居跡江戸堀2丁目6番
梶井基次郎生家跡
『小松左京自伝』
小松左京生家跡 旧京町堀上通1丁目14番
けったいな人々 大谷医院・みやこ寿司
宮本輝が育った家 旧中之島7丁目2番地
梶井基次郎生家 旧土佐堀5丁目34番地
「滑稽新聞」
茂木草介「大槌家の人びと」
三好達治11歳～ 旧靭中通1丁目15番地 (6歳までは転々とした)
中天遊邸跡 思々斎塾 旧京町堀千秋橋北坂本町
宮本 輝「泥の河」
宮武外骨 滑稽新聞社 旧江戸堀南通4丁目10番地
三好達治「乳母車」
築山 桂『緒方洪庵・浪華の事件帳』
泥の河文学碑
梶井基次郎4歳～8歳 旧江戸堀南通4丁目29番地
信濃橋洋画研究所
「檸檬」文学碑
小出楢重 鍋井克之 田村孝之助
森 鷗外『大塩平八郎』
大塩平八郎終焉の地 旧靭油掛町美吉屋
梶井基次郎13歳～ 旧靭南通2丁目35番地 (15歳の時、玉突屋開業)
岡部伊都子生誕地『紅しぼり』
百田宗治文学碑
井原西鶴『好色一代男』
百田宗治生誕地「何もない庭」
初代中村鴈治郎生誕地
山崎豊子『暖簾』
石浜恒夫「こいさんのラブコール」
司馬遼太郎『竜馬がゆく』
新町座跡（大阪屋）
角藤定憲改良演劇
築山 桂『天文御用十一屋』
四ツ橋跡
小西来山 上島鬼貫 句碑
森 鷗外『堺事件』
マンモス・アパート
土佐稲荷
堀江6人斬り 山梅楼跡
南条範夫『暁の群像』
木村蒹葭堂
大石順教尼『無手の法悦』
北条秀司生誕地『わが歳月』
藤井藍伝 玉生堂跡
大阪相撲発祥の地
100m
(C)PASCO (C)INCREMENT P

2.「ニシ」（西船場）の三人　百田宗治・三好達治・梶井基次郎

（1）百田宗治の『何もない庭』

百田宗治（ももた そうじ）は明治 26 年(1893) 1 月 25 日生まれ。41 歳の昭和９年(1934)に刊行した『路次ぐらし』の中に「生まれた家」と題して幼い頃を回想している。新町の西口近くに生まれ、道頓堀で育つ。13 歳で新町橋東詰に草履問屋を営む叔父に引き取られた。島之内道仁小学校から育英第一高等小学校卒業。育英小の２年先輩に直木三十五や宇野浩二がいた。中学には進学しなかったが、フランス語を個人教授で学んだ。

明治 43 年(1910)十一月に創刊された詩誌「白楊」に、18 歳の百田宗治は「百田楓花」の筆名で一編の詩を投稿した。大正４年(1915)に個人誌「表現」を創刊し、詩集『最初の一人』を刊行。人道主義の傾向で、詩集『ぬかるみの街道』によって民衆派詩人として世に認められた。大正８年(1919)27 歳で東京に出た。

春の歌では最も有名な童謡「どこかで春が」は大正 11 年(1922)に百田宗治が作詞し、翌年草川信が作曲した。草川信は同年に、中村雨紅作詞で「夕焼け小焼け」も作曲している。

どこかで「春」が　　生まれてる、
どこかで水が　　ながれ出す
どこかで雲雀が　　啼いている、
どこかで芽の出る　音がする
山の三月　　東風吹いて
どこかで「春」が　　生まれてる

この詩で春を「　」で括っているのは「春」に季節以外の意味をも持たせようとしているとも言われる。

同年には詩集『青い翼』を発表し、

私は、大阪の　みすぼらしい小商人の家の末っ児に生まれた、
上るとキイキイ音のする古い梯子段の下で、
私はいつも固い木箱に入れられたまゝで育った　　（「嬰児」より）

木造の、壊れかゝつた橋であった、
空はいつも曇って
時々その間から青い空が覗きかけた、
両側には材木問屋が続いてゐた
汚れた白壁の土蔵、　　（「川端」より）

というように、新町から道頓堀にかけての幼い頃の思い出を詠った。

大正 15 年(1926)、詩誌「椎の木」を創刊。民衆詩からモダニズムを経て、小学校の教師を指導しながら綴り方運動に発展していった。

戦時中に帰阪して住吉公園西に住んでいたが、昭和 19 年には陸軍報道員として中国に滞在。東京に戻り昭和 20 年５月の空襲で罹災し、11 月札幌に転居し、後に千葉県安房郡富山町に移住し、昭和 30 年(1955) 12 月 12 日、肺がんのため 63 歳で永眠した。

新町公園に詩碑が建てられているが、これは大正 14 年(1925) 11 月に作詩され、昭和２年３月１日、椎の木社刊の詩集『何もない庭』に所収されたものである。

日がかげれば
何もない庭はさびしい
日さへ照ってゐれば
万朶の花の咲きにほふ心地がする

民衆派詩人の第一人者になり、プロレタリア詩を書いていた百田宗治も、俳人西村月杖や室生犀星らと親交を結んで句作をはじめ、この「何もない庭」以降、静寂な俳句的な世界を表現するようになった。

（2）梶井基次郎と三好達治の「青空」

梶井基次郎と三好達治は共に靭に地縁があり、京都の第三高等学校を経て、東京帝国大学文学部に進学という経歴も同じくする。三好達治は陸軍幼年学校を経たため、梶井基次郎より一歳年長であるが、学年は一つ下になった。三高時代は知り合うことがなかったが、東京帝大に入って親交が深まり、終生の友人となった。そして、この二人とも、新町生まれの百田宗治に認められて世に出ることになる。別段、地縁を頼ってのことでもなく惹きあったのは、やはり同じ"ニシ"に生まれ育った匂いであったのか。

いずれにせよ、活躍したのは主に東京だったが、大正から昭和の大大阪時代に開花した文学的才能が、同じ新町から靭にかけての地域に出自を持つことには因縁を感じる。

梶井基次郎

明治34年(1901)２月17日、西区土佐堀通五丁目(現西区土佐堀三丁目)に生まれ、江戸堀尋常小学校から北野中学校、第三高等学校を経て、東京帝国大学文学部英文科に進んだ。中学校時代発病した結核に生涯苦しんだ。父親は次々に外に女を作るような性格で、造船会社を退職して、靭南通二丁目で玉突屋を開業した。

東京帝大生の大正14年(1925)、三高出身者を中心に同人誌「青空」を創刊し、『檸檬』を発表した。同人に三好達治を誘い、同郷であることを知る。伊豆湯ヶ島温泉に転地療養し、同地に滞在中の川端康成や藤澤桓夫、萩原朔太郎、尾崎士郎、宇野千代と知り合い、宇野千代をめぐって尾崎士郎と険悪な関係になる。

昭和２年(1927)、「青空」休刊後は、「文芸都市」の同人となり、『蒼穹』『冬の蝿』などを発表したが、昭和３年、静養のため帰阪し阿倍野区王子町の長屋に住んだ。昭和６年、三好達治らの尽力で創作集『檸檬』を出版。父親への反発から大阪的な俗っぽさを嫌っていたが、翌７年には、初めて大阪を舞台にした『のんきな患者』を「中央公論」に発表し、小林秀雄らに絶賛されたが、病状が悪化し、昭和７年(1932)３月24日、３１歳の短い生涯を閉じた。作品は死後に高い評価を得た。墓所は中央区中寺二丁目の常国寺。

生まれ育った地の靭公園内に「檸檬」文学碑が建てられている。

びいどろと云ふ色硝子で鯛
や花を打ち出してあるおはじき
が好きになったし　南京玉が
好きになった　またそれを嘗
めて見るのが私にとって何と
もいへない享楽だったのだ
あのびいどろの味ほど幽かな涼
しい味があるものか

生前は注目されなかった梶井基次郎を、最初に評価したのは百田宗治で、「文芸時報」昭和２年２月号で「青空」掲載の「冬の日」を「生来の詩人的素質を全く飽和の形にてよく現わしている」と絶賛した。また、基次郎の方は、『淺見淵君に就いて』という昭和三年七月の文章で、

> いつか百田宗治氏に会ったとき、僕は次のやうな言葉を意味深く聞いた。それは、芸術家が憂鬱になるのはいつも自分以上のことを表現しようとするからだ。世間の人は自分の身に合つたことに終始してゐてさうした憂鬱を持たない。どうやらこれの方がほんたうの生活らしい。——
>
> これは反語のやうにもあるひはさうでないやうにも話された。しかしそれは百田氏自身の心境に依つていづれともなり得る。だがこの言葉で大変憂鬱になつたのは僕自身だつた。

と記している。

三好達治

明治33年(1900)８月23日、自伝では西区西横堀町(該当町名なし)に、戸籍では東区南久宝寺町一丁目に生まれ、靭中通一丁目で育つ。靭尋常小学校から市岡中学校に入学。中学二年から陸軍幼年学校、士官学校へと進むが中退して第三高等学校に入学。三高で同級生の丸山薫の刺激により詩作を始める。桑原武夫、梶井基次郎、河盛好蔵、吉川幸次郎らを三高時代に知る。東京帝国大学文学部仏文科に進学し、小林秀雄、今日出海、堀辰雄らと交友した。大正15年、梶井基次郎らの同人誌「青空」に『乳母車』を発表して百田宗治に激賞され、雑誌「椎の木」に作品を発表しはじめた。昭和２年にかねてから心酔していた萩原朔太郎の知遇を得て、その妹アイと出会う。昭和３年(1928) 創刊の「詩と詩論」などに短詩や散文詩を発表し、ヨーロッパから入ってきたモダニズムの表現方法を用いて、日本の伝統詩歌や漢詩が表現した抒情世界を知的につくりかえることで、物真似ではない真の前衛詩の書き手であろうとした。

昭和５年(1930)、中之島図書館に通ってファーブル『昆虫記』を翻訳。同年、処女詩集『測量船』を刊行。昭和７年(1932)に喀血して入院し、それを契機に、フランシス・ジャムや漢詩の詩法を導入し、美しい死的幻想世界から生命感あふれる田園世界と転じた四行詩集『南窗集(なんそうしゅう)』を刊行した。

昭和９年(1934)、堀辰雄、三好達治、丸山薫の共同編集で、主知的抒情詩の拠点となった第二次『四季』を創刊し、戦前の詩壇を牽引した。ただし、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。」と表現したのが、「神州のますらをすぐりあだの拠るわたのかぎりをおほひたたかふ」と歌う戦争詩を書き、第二次世界大戦後、四季派の詩人たちは戦争責任を問われる面もあったが、三好達治は沈潜するニヒリズムを諧謔と風刺で表現した詩集『駱駝の瘤にまたがつて』や評論集『萩原朔太郎』などを刊行した。古典的な抒情をたたえながらも常に清新であり、「万葉にはじまる日本抒情詩の中に一つの近代を確立した」と言われる。昭和39年(1964) ４月５日、63歳で死去。中之島公園に「乳母車」詩碑が建てられている。

また、昭和62年(1987)、帝塚山学院短期大学で教鞭を取っていた小久保実と杉山平一らによって、『四季』とその時代、またその継承の様態、翻訳の問題などの専門的研究と建設的批評を行うことを目的とする。「四季派学会」が創設された。

「乳母車」

母よ—
淡くかなしきもののふるなり
紫陽花いろのもののふるなり
はてしなき並樹のかげを
そうそうと風のふくなり

時はたそがれ
母よ　私の乳母車を押せ
泣きぬれる夕陽にむかって
轔轔と私の乳母車を押せ

赤い総ある天鵞絨の帽子を
つめたき額にかむらせよ
旅いそぐ鳥の列にも
季節は空を渡るなり

淡くかなしきもののふる
紫陽花いろのもののふる道
母よ　私は知ってゐる
この道は遠く遠くはてしない道

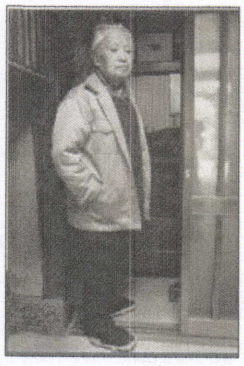
萩原朔太郎の末の妹の萩原アイ

二度目の離婚をしたアイが朔太郎の家に同居するようになり、三好達治が一目惚れして嫁にもらいたいと申し出たが、朔太郎とアイの母が大反対して門前払いにした。その後、アイの方は、詩人で作詞家でもある佐藤惣之助に嫁いでしまい、結局、三好達治は昭和９年に詩人・佐藤春夫のめいと結婚し、１男１女をもうけた。しかし、昭和19年、もう米軍機の空襲が始まっている最中に、三好は妻と離婚し、アイをめとって、福井県の三国で新生活を始めた。

萩原朔太郎の娘の萩原葉子が小説『天上の花　三好達治抄』でこの二人の恋愛と新生活を描いている。

百田宗治は『路次ぐらし』の中で、この詩を激賞した後に、初めて三好達治が自宅を訪れた際、話しているうちに、お互いの生家が近いのを知ったと記している。

小野十三郎



小野十三郎（おの とおざぶろう）は明治36年(1903)7月27日、大阪市南区難波新地二番町百三十四番屋敷に生まれた。大正10年(1921)、府立天王寺中学校卒業。東洋大学文化学科に入学するも、8ヶ月で中退。大正11年(1922)崎山猶逸らと同人誌「黒猫」を創刊したが、13年に終刊した。大正15(1926)、第一詩集『半分開いた窓』を刊行。

昭和5年(1930)、秋山清とアナキズム詩運動の拠点「弾道」を創刊したが、翌6年に終刊した。昭和8年(1933)、家族と帰阪し、南区阪南町に住む。昭和10年(1935)、「詩行動」を創刊したが、同年に終刊。その頃、全国アナキスト一斉検挙で阿倍野署に留置され、処分保留のまま釈放された。その後、阪南町西二丁目三十七に移る。

昭和14年(1939)、詩集『大阪』刊行。これは、伝統的大阪とは異なる工業化していく現実をとらえた詩集で、これによって「葦原の詩人」とも呼ばれるようになったように、かつての葦原に展開する工業地帯と人間性を否定されたかのような労働者の姿を写生した。

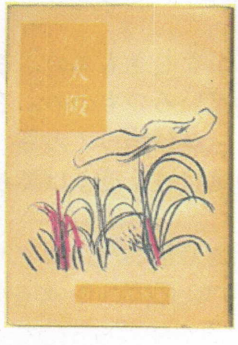
昭和15年(1940)、「詩原」創刊し、生活のため大阪府の露天営業組合連合会に就職した。

昭和16年(1941)、紙類統制が始まり、雑誌統合が図られたため、織田作之助、杉山平一、田木繁と、市販の同人誌「大阪文学」を創刊した。

戦後の昭和21年(1946)になって、吉本興業文藝部に就職したが、翌年に退職。その後は昭和22年に詩集『大海辺』『抒情詩集』『詩論』を発表して、翌年に大阪府民文化賞を受賞し、「詩文化」を創刊した。昭和25年(1950)　現代詩人会創立。昭和27年(1952)、帝塚山学院短期大学講師となる。

昭和28年(1953)　新版詩集『大阪』を刊行し、大阪府民文化賞を受賞する。昭和29年(1954)、大阪文学学校を開講し、校長となる。昭和38年(1963)、大阪文学協会発足、協会の機関誌「新文学」創刊。昭和46年(1971)、文学学校の活動で大阪市民文化賞受賞。昭和50年(1975)、日本現代詩人会会長。平成3年(1991)、文学学校校長辞任し名誉校長となった。

平成8年(1996)10月8日、阿倍野区阪南町の自宅で死去。93歳だった。平成11年(1999)、大阪文学学校により詩を対象にした「小野十三郎賞」が設立された。

詩集 大阪　　初夏の安治川

骸炭の濃い黄ろい煙が生い茂った雑草の頭を撫でて一すじ低く流れている。
湯でも沸かしていつのだろう。
赤坊をおんぶしたひっつめ髪の鮮人の女が共同干場のところにしょんぼりしゃがんで物憂そうに棒っ切れか何かで釜の下をかきまぜている。
線路際の煤ぼけた長屋の天井をガタガタ震動させて西成線の気動車（ガソリンカー）が通過する。
襁褓（おしめ）など干しわたした狭い路地と路地の間に空高く距離の均衡をぶっこわすような巨（でか）い六本煙突が聳えている。
息をひそめている大煙突をじっと視ていると
その静けさに圧されるように
夕暮時の生活のさまざまな雑音が耳に入ってくる。
豆腐やの鈴の音、貨物船の汽笛（ぼう）。
何かを罵り喚く女たちの疳高い声。
蝋石のカケラなどをもって路上に嬉戯する餓鬼共のざわめき。叫び。
夕焼けの中に蚊柱がたち
引込線のシグナルにキラリと橙色の灯が入る。
黒いタンクのような油槽貨車が幾輌もつながり
薄暗い構内のどこかでガチャーンとはげしく貨車を連結する音がする。
だがまだ倉庫裏の川沿いの原っぱには鈍い銅色の太陽が照り
ボールを追うユニホームの白がグランド一帯にチラチラしている。
そして時々ワァッと云う歓声が風に乗ってつたわってくる。